

地域・学校×施設=∞！

日々の暮らしの中で私たちはさまざまな人と出会い、関わりながら過ごしているのですが、地域では、まだまだ障がい者施設や高齢者施設は特別な場所というイメージが強く、そこに通ったり暮らしている人と関わることは多くはありません。

障がいのある人も、高齢者も外国籍の人も、みんな地域の一員。でも、出会えないから特別に出会える場と時間を作って「交流」という名の下に意識的に出会いを作っている地域や学校が多くあります。その反面「交流」が一時的なものでなかなか継続できていないと感じることも多くあります。一度会っただけでその人のことを理解できるでしょうか？ 出会いを活かすためになにかできることはないのでしょうか。

今回の研究会は、施設と地域の人々が関わるということをテーマに、継続的な「交流」を実現している事例を共有しながら、そのあり方について参加者と感じたことを出しあってみました。



車座に座って近い距離で話を聞く

♪ 事例から ♪

■ 若穂・保科小学校とアトリエCOCO ■

若穂の保科小学校の児童と、障害者が働く施設アトリエCOCOは、継続的に交流活動をしています。その名も絆プロジェクト。子どもたちは、障がいのある人たちと交流することで、段階的に「みんなともだち」=ノーマライゼーション(*)の概念を心と体で学んでいます。

保科小学校篠原賢朗先生、アトリエCOCO施設長綿貫好子さんにお話を聞きました。双方にと

篠原先生と綿貫さん



ってこの交流がもたらしたものはとても大きな意味があったようです。施設では、利用者のみなさんが楽しんだり喜んただけでなく、職員の意識向上ややりがいにもつながっているそうです。一方子どもたちの中には、「障がいのある人=特別な人ではなく、自分たちと同じ」という意識が生まれていきます。綿貫さんが子どもたちに話した「みんなともだち」という言葉は、その家族にも波及し、地

域へと広がっています。子どもを介して地域と施設が関係を深めていくことで、排除しない、認め合い助け合う地域を作っていく様子がわかります。今後は学校全体での交流につなげていくことができたらと目標をもって継続しています。

(*) 「障害者を排除するのではなく、障害を持っていても健常者と均等に当たり前に生活できるような社会こそがノーマルな社会である」という考え方

■鍋屋田小学校とハートネット桜枝町■

鍋屋田小学校とハートネット桜枝町からも事例を紹介してもらいました。担任の栗林孝成先生は交流のきっかけを「子どもたちに優しくなって欲しかった」と話します。そのため、いろいろと準備をせず、子どもたち主体で活動してきました。施設の職員入江智子さんからは、「子どもたちが来てくれるのがうれしくて、高齢者はそれを楽しみにしていた」様子を話していただきました。

とはいえ、交流を始めるのも継続するのも簡単だったわけではなく、スタッフ間での調整や日程の調整など苦労はあったようです。それでも続けてきたのは、回を重ねるごとに関係が深まり、気持ちがつながっていくことがわかったから。

昨年交流していた子どもは、1人のおばあちゃんと電話番号を交換し、春休みにおばあちゃんに誘われて仲間と一緒にお食事にでかけたりもしたそうです。おばあちゃんにとって児童は孫のような存在となっていたのかもしれない。

■皆神ハウスと地域のみなさん■

松代の精神障がい者の施設皆神ハウスは、開設当初から地域とともに歩む施設を目指してきました。地域に理解を求め、一步一步ともに歩んできました。今では、施設の利用者は地域から受け入れられ、求められる存在になりつつあります。

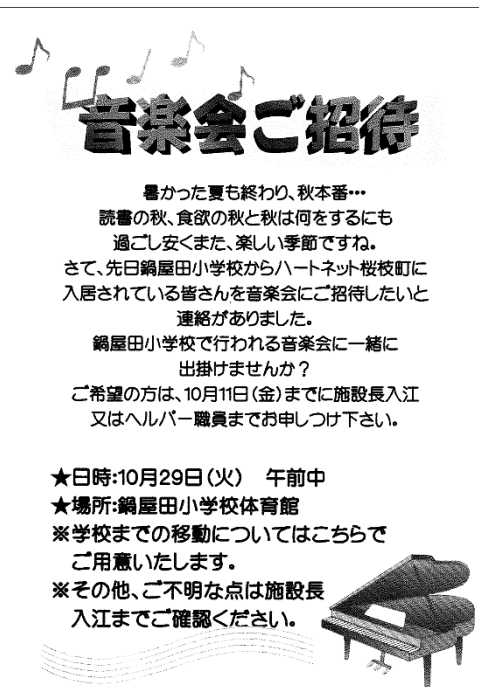
コンサートや体操教室、出張ラーメンなど、施設のイベントに地域のみなさんも参加したり、春には地域の方が山菜を採ってきてくれたり。また、地域のみなさんが利用できるお部屋もあります。障がいのある人たちが講師になって地域の講座などに出向くこともあるそうです。

高齢化した地域を障がいのある人たちが元気にしている様子は、地域にとっても施設は重要な社会資源であることを物語っています。

♪意見交換♪

3つの事例を聞いた後は、互いに感じたことを出し合ったり、質問したりの時間です。

ある高齢者施設の職員からは「施設内でのボランティア受け入れの意識に温度差があって、みなさんはどうしていますか？」と投げかけがありました。それに対し、「施設長の考え方を変える！」「いやいや、1人の職員でもいいから地道に実績を積み上げるべき」「前向きに！ 始めたらなんとかなる」など参加者からの意見が。



今年10月、小学校の音楽会に、高齢者のみなさんをご招待しました。



また、「施設を地域の子どもたちが寄り道できる場所にしたい！ 縁側で宿題やったり一緒に遊んだり」と夢を語ってくれた方もありました。

「ボランティア体験に来た中学生が施設内の草取りをしていたが、とてもつまらなさそうだったので年寄りとお茶飲みしてもらったらすごく楽しそうにしていた。先生方は何をさせてきて施設に来させているのか？ ふれあってこそ意味があると思う」という学校に対する要望も飛び出しました。たった一度しかない活動が楽しくなければ、二度とボランティアをする人には育たないのでは？ と心配する声も。学校側からも「時間的制約で教員も余裕がなかったのかも」しれない。厳しい現状なのは確か」と悩みが出されました。



さらに、事例から「実際に会って手をつないでみる・・・体温を感じる、においを感じる、それに勝るものはない」と思った。大人になった時にきっと思い出してくれると思う」という感想もありました。たとえ多くの時間が割けなくても、心に残る交流はできると思えます。

続けることも、受け入れることも労力が必要ではありますが、継続的な交流が地域・学校と施設をより近い存在に変えていく原動力になるのかもしれませんが。認知症、高齢者、障がい者への理解も身近な場所での出会いが一步となるのでしょうか。